大学生の進路意思決定過程による類型

—進路探索行動の多少や遅延の様相との関連もふまえて—

若 松 養 亮

(滋賀大学 教育学部)

Key Words: 進路未決定 大学生

Type of career decision making process of undergraduates

Yosuke Wakamatsu

(Shiga University Faculty of Education)

Key Words: career decision making, career indecision, college students

【問題と目的】

大学での職業指導義務化の時代を迎えて、学生の個人差をどのように捉えるかは重要な課題である。例えば、意思決定ができていない者、いない者といっても、それぞれの質は多様である (Gordon, 2007)。

本報告では、意思決定の過程による類型化を行う。さらに各類型内での決定者・未決定者それぞれにおける割合と、いくつかの変数との関連を示し、各類型について考察する。

【方法】

10 月中旬に行われた、教員養成学部の 3 年次生が義務参加の就職ガイダンスにおいて、2007・08・09 年に質問紙調査を実施した。有効回答は 492 名、うち女子学生は 63 %、ゼロ免課程生を 34 %を含む。

意思決定過程を査定する尺度は、先行する複数の未決定尺度などから 22 項目を作成したもので、「5.あてはまる」～「1.あてはまらない」の 5 件法で評定させた。

決定者・未決定者の定義は若松 (2001) を用いた。

また他に Stumpf et al. (1983) による進路探索行動尺度を 13 項目 (5 件法)、および未決定者のみに尋ねる若松 (発心, 2010) の停滞様相尺度 14 項目 (5 件法) を用いた。

【結果】

1. 選択過程尺度による類型化

まず尺度の因子分析として最尤法による 5 因子解にプロマックス回転を施し、それぞれ「関与の低さ」「問い直し経験」「早期からの見通し」「見通しの確実化」「長期の検討」と命名した。これらの各因子得点を用いてウォード法によるクラスタ分析を行って得られた 4 クラスタ解を図 1 に示した。それぞれ「長期比較群」「放置群」「試行錯誤群」「一貫確信群」と命名した。決定者か未決定者か、ならびに選択肢に教職が含まれているか (以下、教職の想定) によって各群がどのように分布しているかを表 1 に示した (カッコ内は%)。

一貫確信群は教職を想定した決定者のみといっていよい。また教職を想定した決定者であっても、一貫確信群よりも特定の

選択肢をもちつつ迷う長期比較群が 3 倍近く存在していた。長期比較群は未決定者では少数派であり、放置群と試行錯誤群がほとんどを占めており、特に教職非想定の方では放置群が半数以上を占めていた。決定者のなかでも非想定者は想定者より放置群・試行錯誤群が多かった。決定・未決定による分布の違いはいずれも有意であったが、教職想定・非想定による違いは決定者のみで有意であった。

表1 決定・未決定×教職想定・非想定で4群の分布をみる

		長期比較群	放置群	試行錯誤群	一貫確信群	計
教職想定	決定	114 (53.0)	37 (17.2)	25 (11.6)	39 (18.1)	215
	未決定	14 (14.0)	42 (42.0)	43 (43.0)	1 (1.0)	100
非想定	決定	25 (37.3)	17 (25.4)	25 (37.3)	0 (0.0)	67
	未決定	6 (7.1)	47 (56.0)	30 (35.7)	1 (1.2)	84

次に進路探索行動の 3 因子「情報収集」「自己内省」「外的活動」の各因子得点に対して、決定・未決定×教職想定×クラスタの分散分析を行ったところ、クラスタの主効果はすべての因子で有意になり、長期比較群＝一貫確信群＞試行錯誤群＞放置群であった。教職想定の方では「情報収集」でのみ有意となり、決定・未決定では差が見られなかった。

また未決定者のみを対象とし、停滞様相の 3 因子「手詰まり感」「楽観視」「気の進まなさ」の各因子得点に対して教職想定×クラスタの分散分析を行ったところ、クラスタの主効果は「手詰まり感」のみで有意となり、長期比較群＜試行錯誤群＜放置群であった。教職想定の方では有意ではなかった。

【考察】

表 1 の結果は、決定者・未決定者それぞれが等質な存在ではないという Gordon の指摘を裏付けた。両群間で異なることは勿論であるが、教職想定・非想定でも異なり、また 4 クラスタにばらついていて、大学での職業教育の点では、次々と異なる選択肢に移り易い試行錯誤群、選択行動に本腰が入らない放置群の多さが課題となるであろう。

決定者・未決定者双方において、上記の 2 群に属する人は、進路探索行動が少なかった。十分な探索行動なしに選択を進めることは決定者においても問題であり、未決定者に限らない意思決定支援が必要であることを示唆した。

また未決定者におけるクラスタの相違は、主として「手詰まり感」(何を相談したらよいかわからないなど) が関係しており、楽観視や気の進まなさによるものではなかった。試行錯誤群や楽観視群が多い教職非想定者においては、選択肢が膨大であり、情報も入手しにくいことが関係していると考えられる。本研究の対象者は教員養成学部学生であったが、非想定者の結果は一般学部にも外挿できるものとして、留意していく必要がある。

(本研究は科学研究費補助金：基盤研究(c) 課題番号 21530683 の助成を受けています) (WAKAMATSU Yosuke)